

## 論文内容要旨

論文題名：救急搬送された患者家族の臓器提供意思決定支援のあり方についての検討  
—患者家族に配布された調査票の分析—

専攻領域名：基礎・臨床医学・統合医療領域

氏名：椿 美智博

### 内容要旨

臓器提供システムづくりにおいて、その基礎となる臓器提供による家族の悲嘆やグリーフケア、またはニーズの在り方を明らかにすることが求められる。しかし、日本国内においては臓器提供を行ったことによる家族への影響に関する研究はほとんど見当たらない。A病院では、臓器提供の意思確認への取り組みとして、三次救急搬送患者の家族に対して臓器提供に関する調査票を配布している。これは、ポテンシャルドナーの臓器提供に関する意思の抽出や、救急搬送された患者家族の臓器提供に対する早期の意思確認を目的としている。このような臓器提供の意思確認の取り組みは施設によりさまざまであり、確立した方法やガイドラインの提示はされていない。本研究では、これらの課題を明らかにするために、救急搬送された家族が、患者の臓器提供を意思決定する際の背景を明らかにし、医療者に求められる患者家族の意思決定支援のあり方を見出すことを目的とした。

研究対象は、2014年10月から2015年9月に、A病院 救命救急センターに搬送された患者(2,093名)とその家族に関する調査票、患者・家族の属性、看護記録とした。調査票の内容および患者・家族の属性については統計解析にて分析した。看護記録については質的帰納的分析を行い、意思決定の背景を内容分析の手法を参考に検討した。

調査票では、1,548名を対象とした(回収率: 74.0%)。調査票を記入した家族は配偶者が最も多く637名(41.2%)だった。搬送された患者本人が臓器提供意思表示をしていると回答した家族は59名(3.8%)だった。家族が院内移植コーディネーターの介入を希望した割合は、希望する89名(5.8%)、希望しない638名(41.2%)、わからない821名(53.0%)だった。キーパーソンがドナーカード、あるいは運転免許証等で、患者の意思表示を認識している家族は、介入希望の意思がより明確だった(McNemar検定,  $p < 0.0001$ )。また、キーパーソンが妻の方が介入希望に対して“わからない”の回答が有意に多かった( $\chi^2$ 検定,  $p < 0.0249$ )。

看護記録の質的研究対象は14名だった。いずれもA病院 救命救急センターへ、来院時心肺停止により搬送され、その後死亡した患者の家族である。キーパーソンによる代理意思決定は、患者本人の意思の有無により、その背景が異なることが大きな特徴であった。また、“臓器提供への肯定的な思い”、“否定的な思い”、および“キーパーソンの意思決定を支える思い”が意思決定に影響を及ぼしていた。

救命救急センターにおける臓器提供の代理意思決定においては、キーパーソンが重圧の中で故人の意思を模索し、追体験することにより、故人の意思を尊重しようとしていたことが明らかになった。これには書面のみでなく、生前の語りなども含まれていた。よって医療者の支援としては、患者本人の気持ちはどう思っているだろうかを引き出す関わりが求められ、それにより臓器提供の意味づけを強固にすることにつながると考えられた。